

沼野恭子著

『ロシア文学の食卓』

NHK出版 二〇〇九年一月

ロシアといえば、文学、音楽、絵画などは比較的多く紹介されるのに、「食」は正面切つて論じられることが少ないせい、か、案外その姿が見えにくい。そうした長年のアンバランスが、たった一冊の書物によつて解消されるはずもないが、それをやつてのけたのが沼野恭子氏の新作ではないかという印象を受ける。

飲食と文学を並べて論じた本なら、これまでもいろいろな人が書いているが、本書のように、素材をロシア文学に限り、そこにちりばめられた食べ物の魅力を、ここまで丹念に拾い上げた試みというのは、ちよつと類がない。

日頃、ロシアの食文化と縁のない生活の傍らに、こんな書物を置いてみるのはいかがか。けつして分厚くはないが、これ一冊で、知られざるロシアの食の世界をぞんぶんに堪能できる。読むほどに、いつそう、ロシア料理への憧れが募る。

*

頁をくれば、そこはロシア文学／料理の専門店。メニュー＝目次をみれば、前菜を皮切りに、スープ、メイン料理とコースを進め、サイドディッシュも忘れず、デザート、飲み物で締め

くくるといふ本格的なフルコースだ。

ブリタイやらボトヴィーニヤやらプリヤーニクやら、ふだん食べつけない料理がずらりと並ぶ。それぞれを飲み食いする生き生きとした描写をたどっていると、ロシアの食卓の情景がありありと思ひ浮かぶようだ。ひよつとして、料理の味や香り、舌ざわりさえも。読むほどに、言葉の美味しさが、身体に染み渡っていく。

たとえば日本でも馴染みのピロシキを、ゴーゴリの代表的長篇『死せる魂』は、いかにも旨そうに描いている。『鼻』、『警察官』など、ゴーゴリの代表作の多くがそうであるように、この『死せる魂』にも飲み食いの場面がふんだんに出てくる。悪漢主人公チチコフは、ゆく先々で馳走を振る舞われ、その都度心ゆくまで食事を楽しむ。正体は詐欺師のくせに、ピロシキをはじめ、湯気立ちのぼる手料理の数々を、ああうまい、ああうまい、と口にほうり込むのだから、羨ましくも憎らしい。

ゴーゴリはさすがに稀代の食通で、食べ物のことを念入りに書いている。この食事の内容が、チチコフの山師商売のバロメーターになっているという本書の指摘が面白い。つまり美味しい食事をご馳走になると、がっばり稼ぐし、たいした食事を振る舞われないと、苦勞も水の泡というように、「もてなしの食事とチチコフの将来の夢が連動している」のだという。

ひさしぶりに岩波文庫版（平井肇・横田瑞穂訳）を読みなおしたが、人物描写にもまして食事描写がしつかりした小説であることが新鮮な驚きだった。以前、ただ読み過ぎた食卓の描写が、俄然光って見える。ピロシキについても、ちゃんとツボをおさえた書き方があって、その濃密でうっとりすることば

の味わいといったら。

これほど口腹のよろこびを高らかに謳いあげた文学作品も珍しいだろう。『死せる魂』を、沼野氏はロシア文学「二大グルメ小説」のひとつと認めている（ちなみに同点首位はゴンチャロフの『オブローモフ』）。

十九、二〇世紀のロシア作家たちがそれぞれに印象的な食卓風景を描いていることが、本書を読むとよくわかる。だが面白いことに、この本で主役級の存在感を放つのは、必ずしもロシア文学を代表する文豪たちではない。むしろ「食」という観点から読みなおすと、ドストエフスキー、トルストイ、ソルジェニーツインのあたりは、たかだか脇役にすぎないという印象だ。この不思議な現象について、沼野氏はつぎのように述べる。

ロシア文学は、かならずしも伝統的に食事の場面がたくさん描かれている「グルメ文学」というわけではない。むしろ精神的なものを重んじ物質的なものを疎んじる禁欲的な傾向が強く、食事や料理といった物質的・肉体的なものを下品なものとして見なしてきた。さほど多くの作家が筆を、いや腕をふるってきただとはいえない。

腑に落ちる説明だ。元来ロシアの知識人には、衣食住やお金に関する「物質的なもの」を、魂や文学に関する「精神的なもの」より低く見る傾向があるのだという。

本書で紹介される『罪と罰』を例に取っても、ドストエフスキーは食生活の具体的な細部を描くことにさほど熱心ではないし、主人公ラスコーリニコフにいたっては「食事そのものに嫌

悪感を持っているのではないかとすら思えてくる。なにしろ、ものを食べない」という具合だ。

三度三度の食事を顧みないラスコーリニコフという人物には、ロシアの知識人の「食」に対する典型的姿勢がよく表れている。酷な言い方かもしれないが、魂や芸術という抽象的な問題めがけて突進できるというのは、裏を返せば、生命を維持する人間という視座が抜け落ちているということではないか。

だが、それはあくまでも全体としての傾向であるとのこと。個々の作品にあたるなかで、著者のまなざしが見据えてゆくのは、ロシア文学に描かれる、かくも多彩でめくるめく食の世界に他ならない。たとえば、ジャガイモしか出てこない粗末な食卓にも、ソルジェニーツインの大地に根ざした人間観を読みとるといのように。「食欲」のない作家たちをも受け入れる懐の深さが、そのまま本書の味わいの深さとなっている。

*

本書は「食べること」が人間の活動の基本であるという、健全な「物質主義」を唱えるロシア文学者にはじめて書くことのできる本であったといえる。ロシア文学のなかで食がどのように描かれてきたか——それをこれまで誰も真剣に取りあげてこなかったのは、食文化が卑俗な領域とみなされていることとおそらく無関係ではないだろう。

従来のロシア文学の紹介とは、ひと味もふた味もちがう、まことに滋味掬すべき書物。味読せずにはいられない。

（住岳夫）